

国際島嶼教育センター

鹿児島県には日本一が少なからずある。離島の面積や、離島の人口もその一つ。そんな本土最南端という地理的特徴を生かしたのが鹿児島大（鹿児島市）の国際島嶼教育研究センターだ。離島を専門に扱う全国でも珍しい研究機関で、「島はひとつの世界」をモットーに、島特有の自然環境や文化などの調査を続けている。将来は国内外の研究者が集結、共同利用、研究できる拠点施設を目指す。

【黒澤敬太郎】

同センターが研究対象とするエリアは広い。県内に145ある離島はもとより、東南アジア、オセアニア一帯もその範疇にある。

昨年4月、多島圏研究センターから改組した際、大学院生向けカリキュラム「島嶼学教育コース」を新設した。必修「島嶼学概論Ⅰ、Ⅱ」▽選択科目「離島医療学」「文学人類学特論」「植物生態学特論」「国際農業資源学特論」などから成る。

離島の環境、文化調査

鹿児島大 国際的拠点を目指す

島嶼学概論は、島嶼経済学▽防災復興学▽地域おこし学などを学ぶほか、年2回、硫黄島（三島村）とトカラ列島の中之島（十島村）で実地研修し、島の生活を体験する。鹿児島市から村営フェリー（週2便）で約7時間の中之島。小さな研修センターで、村職員が大学院生5人に日常を説明した。「港に船が着くと、島民が当番制で生活用品を作る人、運ぶ人、買う人が別々だが、島ではすべてを島民で担っている。自分の生活とはかけ離れた」と肌で感じた。

このように基本を学ん

などの荷役作業にあたる。ずっとこうやってきた」。5人はインターンした漁師や畜産農家たちからも生活ぶりを聴いて回った。

畜産農家の一人は「主要産業の畜産は、牛を売るためのフェリー代やエサの輸送費がかかり、本土と比べて不利」と切々と語った。車が壊れたら自ら修理、医者が常駐していない不安……。別の大学院生は離島の現実に考えさせられたが、一方

だ上で、離島における救急医療▽疫学研究▽島嶼社会・文化人類学▽海洋生物の水産資源としての活用——など専門分野での研究を進める。

野田伸一センター長は「学生が学んだことを、将来的に島に還元するところがセンターの存在意義。島の発展に向けて学生の積極的な提案、行動を期待したい」と話している。

国際島嶼教育センター

鹿児島大が昨年4月に設置した教育機関。1981年に開設された南方海域研究センターが、南太平洋海域研究センター▽多島圏研究センター▽国際島嶼教育センターと改組を繰り返しながら発展してきた。島嶼学の国際的拠点を目指す。ミクロネシア連邦やオセアニアなどの環境変動、生態系、経済、医療などについて現地をわたり調査している。「学内横断型」をキーワードに、専任教員4人のほか、約60人の兼務教員が在籍。

新 教育の森

九州・山口



中之島の島民（中央）らが語る島の生活実態を熱心に聴く大学院生たち